

夫婦別姓 —家族と多様性の各国事情

夫婦同姓が法律で強制されている一選択肢がほかにないのは日本だけである。1996年に法制審議会が選択的夫婦別姓の法案を答申してからすでに四半世紀以上経ってしまった。

本書は、二部構成をとり、第一部「結婚と姓—各国の事情」では、夫婦別姓が可能な英國・米国・ドイツ、通称使用が合法化されているフランス、別姓が原則のベルギー・中国・韓国に居住する筆者たちの実体験に基づいた実情が報告されている。経済・社会・政治の変化、そして家族のあり方についての法律の変遷を踏まえ、各国の現行制度になるまでの歴史的経緯を、簡潔に分かりやすく解説している。個人を取り組む社会関係、その中心であろう家族においての、それぞれの幸福のあり方を尊重することは、婚姻当事者間の対等性と家族の多様性につながる。各国の現行制度は、その國の人びとが、熟議の末に到達したものなのである。

第二部『選べる』社会の実現に向けてでは、立法、司法、経済界から登壇者を迎えての座談会の記録である。どの立場からも、変化の速い現代において、多様性を尊重することこそがそれぞれの組織や国の強さになること、選択的夫婦別姓もそのために必要なものの一つであることから、日本の将来のためには現実に法律が追いつくべきであり、機は熟しきっているとの認識が示されている。

変わらないことに安住して思考停止していくことは、落ちていくだけであることは、世界経済フォーラムのジェンダーギャップ指数で156カ国中120位(2021年)なことからも明らかである。

みなみのかよ
京都女子大学 法学部 教授 南野 佳代さん



- 栗田 路子、富久岡 ナヲ、
プラド 夏樹、田口 理穂、
片瀬 ケイ、斎藤 淳子、
伊東 順子 著
- 筑摩書房
- 2021年初版
- 940円(税別)

多様性を尊重する

多様性が尊重されるとは、各自が自分の幸福の形を選び取る自由があるということである。選択的夫婦別姓制度を実現したとして、本書の各国事情を見ても、別姓を選択するのは少数派にとどまるだろう。つまり、「多数派」にとって世界が180度変わるわけではなく、「少数派」が苦痛から救われるだけなのである。「政治は、困っている人がいれば、その困りごとを解消するのが役割である」という第二部の座談会登壇者の言葉に期待したい。

私は男でフェミニストです

本書の著者は、韓国の男性教師でありフェミニストだ。韓国で大学教育を受けて安定した仕事を持つ彼がなぜフェミニストになったのか。著者も、「女性でもないのに、なぜフェミニズムを勉強するのか」という質問をよく受けている。私は彼の率直なメッセージが気に入った。「男だからよくわからないんです、学ばないと」と。フェミニズムは、女性であるが故に経験する不条理な人生と性差別的な経験をただ運命だから仕方ないと受け入れることを拒否し、これを改善しようとする思想であり実践だ。だからフェミニズムは女性(のみ)のためのものだと考える人が多い。それに対して著者は、「男だからもっと学ばなければならぬ」と答えるのだ。

本書を読んでいくと、著者がフェミニズムを通じて何を学びたかたのかが分かる。まず母親の人生を理解することだ。そして、幼い頃に男らしさを強要されて感じた違和感と不快感だ。日常生活で経験した性別役割に対するモヤモヤがフェミニズムに深い関心を持つきっかけになったのである。著者はフェミニズムを勉強しながら、母親の人生を、家父長制下の女性に強いられた不払い労働の観点から見直すことができ、また、硬直的な男らしさからも解放された。ベル・フックスは「フェミニズムはみんなのもの」と述べた。そう、男性も女性も、この本を手がかりにして、みんなが幸せになる社会を作っていく道を歩み出そうじゃないか。

しんきよん
お茶の水女子大学 教授 申琪榮さん



- チエ・スンボム 著
- 金 みんじょん 訳
- 世界思想社
- 2021年初版
- 1,700円(税別)

キムチ女

韓国で2014年頃から流行した新造語。デートや恋愛、結婚における経済的な負担はすべて男性に要求して贅沢な生活をする一方、従来の慣習的な女性の役割規範には従わない女性を揶揄している言葉。キムチ女は女性蔑視的なネットコミュニティを中心に広がり一般化したが、若い世代の男性によるこのような非難の背景には、男性としての優位性を放棄したくないが、経済的に成功する見込みがないなか、競争相手となった同世代の女性たちに対する劣等感が屈折した怒りとして表出したとみられる。

#生理の貧困—#PeriodPoverty

2021年頃から「生理の貧困」という言葉を耳にする機会は増えてきた。しかし、これを単に「生理用品にかけられるお金を持てない」という印象だけで語ることは大きな誤りである。本書では、まずこの「誤解」について明記されており、「物理的貧困状態」だけでなく「教育・精神的貧困状態」も合わせて捉えることの必要性・重要性に触れている。これが、「生理の貧困」について考える上での大前提となる。

また、産婦人科医としては、医学的観点から「なぜ生理(月経)を社会全体で考える必要があるのか」をぜひ広く知りたいと考えている。月経は「生理現象」として身体的女性に原則存在するものであり、妊娠・出産をするしないにかかわらず数十年に及ぶ影響を心身に与えるものである。月経を不衛生にしか管理できなければ感染症や皮膚炎のリスクが高まる。包括的性教育が普及していないことを背景に性暴力や意図しない妊娠が生じる。また、月経痛は多くの女性が抱え、日々の生活や学業・仕事に与える影響は大きい。これは同じ社会に属するすべての人が理解しておくべきではないだろうか。このような医学的観点からの解説も本書に含まれていることは産婦人科医としてもありがたい。

加えて、こうしたムーブメントに伴う歴史的背景やバッシングについて述べられている。より本質的な理解を深められるとともに、一方的に批判していく人の思考を解釈するために有用だろう。

60ページほどで読みやすいがよくまとまっている。ぜひ、性別にかかわらず手にとってほしい一冊である。

しげみ だいすけ
産婦人科専門医・公衆衛生学修士・医学博士 重見 大介さん



- #みんなの生理 (福井みのり)、
ヒオカ 吉沢 豊予子、
田中 東子、田中 ひかる、
河野 真太郎 著
- 日本看護協会出版会
- 2021年初版
- 900円(税別)

包括的性教育

包括的性教育は、国際的に広く認知・推進されている「性に関する知識やスキルだけでなく、人権やジェンダー観、多様性、幸福を学ぶ」ための重要な概念かつ手段であるが、日本ではまだ普及しているとは言い難い。性別にかかわらずセクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス＆ライツを改善・向上するためには、この包括的性教育を拡充・浸透させていくことが不可欠だと考えられる。



- 岡本 早織 訳
- 創元社
- 2021年初版
- 1,500円(税別)

ルース・B・ギンズバーグ名言集 —新しい時、新しい日がやってくる

北九州市立大学 法学部 教授 田村 慶子さん

本書は、ルースが法廷や講演、インタビューなどで発した数々の印象的な名言から50余を選んで紹介・解説した好著である。彼女は、法律家として、アメリカ史上2人目の女性最高裁判事として、ジェンダー不平等だけでなくあらゆる差別をなくし、自由と平等を実現することに情熱を傾けた。2000年代以降アメリカ社会が保守的傾向を強めると、彼女の人は高まり、名前の頭文字を取った「RBG」の愛称で親しまれた。講演会には長蛇の列ができ、伝記本やドキュメンタリー映画がつくられただけでなく、「RBG」グッズも発売されるなど、最高裁判事としては異例の社会現象が巻き起こるほどの人気を博した。

私が心打たれたルースの名言を3つ紹介しよう。「ある人の性別と能力には、何の関連性もありません」(1973年)。当時は性別によって活動領域が異なると考えられ、男性が世界を動かし、女性は家にとどまるものと考えられていた。彼女は、連邦最高裁の口頭弁論で肌の色と能力には何の関係もないように性別と能力には関係しないと明快に述べ、男性ばかりの判事を説得したのである。

「反対意見は、未来の時代に語りかけます。[中略]優れた反対意見は、未来の判断になることもあるのです」(2002年)。反対意見は明日のためにあるべきという彼女の未来志向を表す言葉である。

「自分にとって大切なことのために闘ってください。ただし、他の人が仲間に加わりたいと思うようなやり方で」。これは2015年に現代の若い女性に贈った言葉で、一方的に自分の意見を押しつけるのではなく、賛同する仲間を増やしながら闘うことの重要性を教えている。

本書を通して、次世代のために閉ざされた扉を力強く開いていった彼女の言葉と功績にぜひ触れてほしい。